

自著と
その周辺

長野県立こども病院方式 超低出生体重児の管理マニュアル

メジカルビュー社
352頁
2019年発刊
定価 8,000円

監修 中村友彦

編集：廣間武彦，宗像 俊，小田 新，小川 亮

超低出生体重児（extremely low-birth-weight infant: ELBW）とは、出生体重1,000 g未満の児で、この30年間で日本の出生数は減少していますが、超低出生体重児の割合が増加し、超低出生体重児の出生数は35年間で約2倍に増加しています。日本における超低出生体重児出生の要因としては、①若い女性のやせ、②喫煙、③不妊治療の増加等による複産の増加、④妊婦の高齢化、⑤妊娠中の体重管理、⑥帝王切開の普及等による妊娠週数の短縮、⑦医療技術の進歩など、社会、文化的、保健、医療的なさまざまな因子が指摘されています。

私が信州大学医学部を卒業して、小児科教室に入局した1984年当時は長野県内で超低出生体重児は救命できることはできず、長野県の新生児死亡率（出生千人当たり生後1か月までに死亡する児の数）は4.0と全国で高い県でした。しかし、1993年の長野県立こども病院の開院後、長野県の新生児医療は急速に進歩し、現在は長野県の新生児死亡率は1未満となり日本で最低となっています。超低出生体重児も現在は、ほとんどの児が助かり2019年には出生体重が258 gと男児としては世界最小で出生した児も無事退院し順調に成長発達しています。

長野県立こども病院が開院した翌年の1994年にメジカルビュー社より、全国で最初の総合周産期母子医療センターである東京女子医科大学母子総合医療センターの超低出生体重児（当時は超未熟児とよばれていた）医療のノウハウをまとめた『超未熟児』が刊行され、超低出生体重児管理のバイブルとして日夜熟読していました。

今回、その『超未熟児』の後継本として本書の企画を頂いた時は、身に余る光栄であるとともに、期待に応えられる内容を刊行できるか不安でした。現在は、日本の超低出生体重児の予後は目覚ましく改善し、そして世界一と諸外国からも認められています。長野県立こども病院 NICUでも、その時々最新の知識と、我々が蓄積した経験、そして想像力を駆使して「超低出生体重児の管理」を進歩させてきました。そのなかには、「常在菌獲得を目指した母乳綿棒の口腔内塗布」「オリジナルマットによる体幹、四肢のポジショニング」など当院から全国に発信した管理法も少なくありません。当院の特徴は、医師だけでなく看護師、理学療法士が積極的に新しい治療・管理法の開発に関わってきたことかと思えます。本書では、その当院の特徴を生かして、全項目に「看護師からの視点」を記載しました。また、フロー図・写真を多く使い、視覚から理解できるように心がけ、代表的な疾患については出生からの時間経過に沿った管理法について別途まとめました。従って、本書は超低出生体重児の診療に関わる、新人からベテランの医師のみならず看護師にもご利用頂けることと確信しています。海外の新生児科医からも本書の購入希望があります。本書の内容が世界に発信され、「日本のみならず世界の未来を担うこども達とその家族のために」お役に立つことを願っています。

今や、日本のみならず世界の頂点に立つ長野県立こども病院方式「超低出生体重児の管理マニュアル」を信州大学医学部同窓会の皆様にご紹介させて頂きました。

（長野県立こども病院，信州大学医学部新生児学・療育学講座 中村友彦）

